

# 易における政治思想の概見

松井喜代司

## (1) 易・周易・易経入門

易に説くところはたしかに一種の宇宙観であり人生観である。これを基調としてみれば未来の予言も可能であると言わねばなるまい。元来、易の根本となるべきものは僅かに二経十伝に過ぎないとされてきたが長い時代を経過し、幾多の研究がつまれて四庫全書に著録されたものだけでも実に159部、1748巻、存目には317部、2371巻に亘っており、さらにそれから派生した諸種の類書を数えるならば、実に汗牛充棟もただならぬほどであるという。これをみても易が東洋思想界にあって如何に独自の地歩を占めているかを理解されるであろう。また支那民族の日常生活に甚大な交渉をもっているかを伺い知ることが出来よう。

われわれは自然と人生とが複雑混淆としている諸相に直面したとき、ややもすれば一種の偶然的現象としてものごとを解釈しがちになる。これがまた普通なのである。しかし少しく間をおいて瞑想静思すると、それら雑多の諸現象は必然的の結果であるということを想察出来るのである。しかも尚、それが偶然であるかの如く考えられていたことでも、やがて科学の進歩につれて漸次解決されていったことを知るであろう。われわれが営む人生の行路に、現実が存在するところの人倫関係は多岐にわたっているとは言及するまでもない。一般的に言えば男女両性間の関係、特殊的に言えば君臣、父子、夫婦、兄弟、長幼、朋友等の関係である。この続柄関係において誰もが憑依すべき、過不及なき、穩健中庸な道德的原理を把握し

得たいとの予想があるに違いない。だからこそわれわれは、あらゆる經典に対して敬虔の念を抱くのである。またこの予想、この要求は聖凡を通じて共通なのである。筆者は易の初歩的な研究をこんなところから考えてみたいと思う。

元来、易そのものの目的とするものは占筮<sup>1)</sup>であった。不完全な人智で判断予測し得られない場合、超自然的な絶対者の力に憑依して事の善惡去就を決めることにその目的がおかれている。これは一面、宗教的迷信的諸觀念に結びつけられているようであるが決してそうでなく、古代中国における自然発生的な弁証法的思想及び素朴唯物論的な世界觀が見出されるのである。ただ「絶対者」が超自然的なものである限り、人は何等かの方法、手段によってその意思を測知しなければならない。その必要上、顕われたものが所謂、占筮である。故に占者は私念を掃蕩して一意専心、神性を祈願することによって、単なる人としての自己をば絶対者の意思の伝達者にまで浄化するを要するのである。ところが如何に占者といえども人間である以上、またよしんばそれが絶対者の意思を仮定したとしても、その伝達には誤惑を免れないフシも屢々見出されるのである。従って大事を占う場合においては必ず3人に占わせて、その結果、去就を定めたともいわれている。このような事実問題を考えるとき「占い」は絶対的合理性を有するものではないことになる。世人はよく「占」と「易」とを混同し曲説も甚だしく喧伝されているのでアドバイスしておく必要がある。「当るも八卦、当らぬも八卦」の言葉はそのよき例であろう。「占」＝「易」ではない。易經の中に「占」いが包含されているから、単なる吉凶禍福の判断書ではないこととなる。そればかりでなく易經は深奥な經文によって組立てられており、われわれ人間同志が人生の行路にあっての道標<sup>みちしるべ</sup>となる倫理道德、中庸の生活を営んでいく上において、必要欠くべからざるところの原理を教導すべき役割をなしているのである。その理由づけを筆者は孔子を引誘してみることにする。

孔子は易の愛読者でありまた研究家でもあった。周知の如く孔子の門弟、就中、身六芸に通ずる者70有余人と伝えられ、門人総数、実に3000人に及ぶと聞知しているが、それらの弟子たちから尊信崇拜の焦点となっていた孔子の日常生活——それは完全なる人格の表現にアプローチしていた——を推測するに余りあるものがあったに違いない。完全なる人格者の好愛するところは、あくまでも理想的でありまた道徳的であるのが通念となっているから、孔子の易経愛読の理由はそんなところにあったかも知れない。

さて単に易といったり、周易といったり、或はまた易経といったりするのは如何なる理由によってであろうか、という問題を説述してみよう。易経というのはいわゆる易という書冊が他の書・詩・礼・春秋と併せて五経と称し、さらに楽を加えて六経と称するように何れもみな経典であるという意味である。ところで単に易と単称せず、わざわざ周の字を加えて周易と名付けるからにはそれなりの理由がなければならないと思う。それについて、きまって問題になるのは、易に三つの種類があることに起因していることである。すなわち周礼、春官の大卜の職<sup>2)</sup>のところに「掌三易之法。一曰連山。二曰歸藏。三曰周易。其經卦皆八。其別皆六十有四」とある。この三易に関する解釈はいろいろあって諸説紛々としている。唐の孔穎達の説が大体、通説になっているのでこれをみてみる。それによれば第一の連山の易は連山氏、つまり神農氏の易で夏の時代に用いられたものであるといっている。第二の歸藏は歸藏氏、すなわち黄帝の易で殷（商）の時代に行われたものであると伝道されている。第三の周易は言うまでもなく周代における易のことである。時代の変遷によって何時しか連山・歸藏の易が亡失し、後世わずかに周易一書を伝うるのみとなり、これが現今の易経になるに及んだのである。三易の内容を簡単にいうと次頁の説明の如くなる。

1.連山…… ☰☰ ( 山上の如しである。晴れの時は山頂を望む  
ことができ、曇りの時は雲を湧出し、連々と  
して絶えない有様を人事に象るもの。 )

2.帰蔵…… ☷☷ ( 森羅万象をその中に帰蔵している  
という意味によったもの。(これ  
は地球に重きをおいてあるもの。)

3.周易…… ☰☷ ( 易道というものは、時空間を超絶してあ  
らゆる時、あらゆる処に周普するもので  
あるという意味を表わしたものである。 )

前にも述べておいたが周礼の中には「大卜」の項があり、これは政治の基本となっている。これには政治を行うには数を以て為すということが説かれている。平たく言えば今日でいう多数決、或は世論等に該当するものを説いているのである。このようにして易を見説してみると、たしかに易が政治上重大な役割を演じているかを知ることができるであろう。もともと東洋政治の特徴は、人民に対して間違った政治をしてはいけないという人倫的な思考性が基準となっているから、ことのよし悪しを決定するに当然問題となってくるのは判断する心構え如何に係ってくるのである。そこにおいてわれわれは占いの学問が東洋政治学上、必要不可欠の要素になっているのは「判断」にウエイトがかかっていることを知らねばなるまい。

「政治は生きもの」と言っているように事態の動向は絶間なく変転万化し、正に一寸先は真暗闇なのである。なるが故に判断力が、ガバナビリティ（統治能力）のキメ手になってくることを覚悟してかからねばならない。ともあれ易は研究すればする程難艱な学問である。そればかりでな

く一生涯を通じてさえも卒業することは不可能なのである。これを体験するには容易ならざる至難の極に達すると言わなければなるまい。深奥高邁な哲理を把握している。同時に宗教の問題を並立して思考しなければならない。

われわれは日常生活において惑うことなく、人生を楽しく安らかに送ることを願っている。しかしこの流転生滅のはげしい娑婆世界にあって、理屈通りうまく人生を渡っていくわけにはいかない。大抵の人は四苦八苦の苛責に喘ぎながらも多少の幸福を求めて生活をしていくのが精一杯であろう。だがこうした社会の生活環境の中で易学を応用したり、適切な判断力によって世に処していく人々を見逃すわけにはいかない。そうしてみると易は哲学、倫理の本原神髄を研覈すべき最大必読の書であることになる。以上易入門について、雑駁な走筆を試みてみたがその意義は深遠そのもので驚歎に価する。ともあれ諸説紛起しその注釈さえも実に汗牛充棟の多くに達しているので筆者は便宜上、これを大別して象数・理義の二派に分類してみる。象数派は漢代儒者の古説で象数によって判断を下し、理義派は哲理を主として立論するものであるから、その説は自ら異なってくるのである。しかし易の書は前述の如く象理二者の具備を以て、その成立をみるのであるから、その実は象数を離れて易理を説くことができない。またそれと同時に理義を外にして易象を解くことはできない。必ず二者を摂取してかからねば易とは言えない。

注 1) 占筮

「センゼイ」・「うらない」・「うらなう」という。これは宋の時代に端を発したといわれている。筮竹五十本を使用して占う。占者が使用している筮竹は、はじめ蓍（シ）という草を使用していたという。この草は世界中どの国でもみられない。強いていうならばアフリカ辺の奥地に存在するといわれているが依然として不明である。それより時代の変移に随い今日のような筮竹を用いるようになったといわれている。竹を用いたのは草よりもモチがよくその上実用向きであったからであろう。

## 2) 春官の大卜について。

周礼は今より数えること約六千年前の文献で東洋においては極めて貴重なものとしてとり扱われている。相当に古いもの故に学者間にあって種々論争が繰返されている。春官の大卜の職は通俗にしてみると、政治の実際問題を占うことである。すなわち何か大事業をなすとき、予めその仕事に対して祈りを捧げ、結果の是非を論争したり、仕事に対する期待を吉凶占い……一種のナゾ解きなどをするのである——上代支那においてはこのような習慣があった。これがそもそも「易」のはじまりとなったと語り伝えられてもいる。

## (2) 易の弁証法的な考え方

易の弁証法にあたって老子の言を借用してみよう。老子は道德経第四十二章に「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負いて陽を抱き、沖氣以て和することを為す」と述べているように、実に自然発生的な弁証法及び唯物論的な考えをもっていると言える。陰陽思想の萌芽は大体、子思以後すなわち戦国時代の頃と推定されているが、これは易の原理となっており、すべての事物、世界全体が絶えざる流転変化のうちにあるとしてみる自然発生的な弁証法的世界観である。つまり、進・退・動・止を極まりなく察知推定する以外なにものもないのである。この弁証法的世界観は、ある時には宗教的な迷信と結びつけられたり、また儒教的な中行思想とか中庸思想と結合されているから、この世界観は純粋な形での弁証法ではない。しかし易経における易の原理をなすものは、あくまでも一切の事物はきわまりなき変易であるということである。また世界は果てし無く生成し、発展し、生滅し、運動し、矛盾をふくんだ限りなき変化のうちにあるという思想である。つまり易とは「変易することなり」という思想である。「易は易也」から「易は変易也」となり「易は不易也」ともなっていくこの原理はベルグソン哲学と対比してみると興味をそそるものがある。

さて易として最初につくられた形はいわゆる「八卦」であった。この八卦の基礎は陰陽両性の対立に他ならない。易経における根本原理、易の組織の基根は陰陽二元の対立であり、この対立に基づくあらゆる事物の生成、発展、生滅の絶えざる運動変化なのである。故にわれわれは易経のうちに多数の対立語をみることができる。すなわち吉－凶・禍－福・大－小・遠－近・内－外・出－入・進－退・往－来・上－下・得－失・生－死等がそれである。易経にはこのような対立物の矛盾を整理するために「小なるもの往きて大なるもの来り、大なるもの往きて小なるもの来る。平かなるものは陂かざるは無く、往きたるものにして復らざるは無し」と表現している。これは換言すれば陰と陽との対立、矛盾による一切の生成・変化を言ったものであり、陰が極度に増殖すれば陽になり、陽が極度に増殖すれば陰に变じ、この交代が相錯綜して一切の事物の運動・変化が行われるというのである。けれどもこの弁証法的世界観は時代の推移によって著しく変っていった。すなわち変易の原理は恒久不変な絶対者であったから觀念的実体としての「道」であった。同時にそれは「神」でもあった。易＝道＝神とされることによって上代中国の自然発生的な弁証法的唯物論はついに宗教的觀念論に転化していったのである。

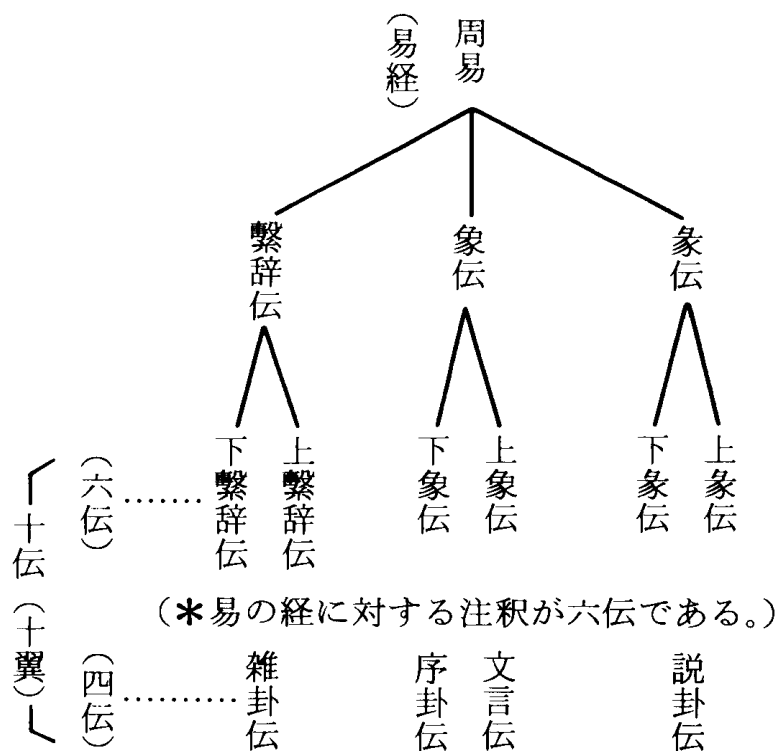
要するに宗教的觀念論のうちに埋没してしまった易（陰陽）は、弁証法及び唯物論として独立的な体系にまで理論的に意味づけられなかったにせよ、古代中国の唯物論はインドにおけるアジタのそれと異なり公然たる唯物論でもなければ無神論でもなかったのである。ましてやギリシヤにおけるデモクリトスの唯物論でもなかった。その理由は春秋戦国時代の新貴族層の進歩性の本来的な制限、彼等の究極的な保守的性質によるのである。結局、中国においては奴隸制は共同体的諸関係によって制約されていたから、自由な商工業者の進歩的グループを生み出すことができなかったのである。従って商工業者たちは土地貴族に対して常に従属的であったのである。このことはまたインドにおいても同じであった。

### (3) 易の作者及び内容と字義について

「八卦を見る」という言葉がある。八卦ということと易が同一的に取り扱われているようである。もとより八卦は易の根本原理になっているが、易は八卦よりもはるかに広い意味をもっているのである。現在、易と称えられているものは前述の如く周易（易経）とよばれている。人はこの周易を基として疑を解くために卦を立てるのである。これがいわゆる「八卦を見る」ことになるのである。しかし易は八卦を見ることだけに存在しているものではない。換言すれば単に疑を決するということばかりでなく、その他に種々な意義が含蓄されているのである。それでは易経というものはどんな形をなしているのか、そしてどんな内容をもっているのかを順序よく説明してみることにしよう。

易は「経」と「伝」との二部に分れており、経はさらに上下に、伝は十翼（十伝）といってその名の如く十篇から成立している。「翼」というのは経を輔けるという意味である。（図1 参照）

図1





十伝のうち、彖伝は彖辞、象伝は象辞について説明をしたものであり、上下に分れている。繫辞伝は一経の大意をのべているようである。また、このなかには宇宙論的説明や人事関係についての多くの理論が含まれていて易にとっては重要な記述が載っている。文言伝は乾の卦と坤の卦のみについての字句解義がなされており、説卦伝は主として八卦についてその徳性、変化及び法象を説いたものであるとしてみる事が出来る。序卦伝は上下経につき各卦の生起して来る順序を説いたものである。最後に雑卦伝は各卦の義を一字を以て簡単に説いたものであるが、要するに十伝の内容は六十四卦、三百八十四爻の意義をいかにして開物成務するかにあると思う。


次に易は誰が作ったか、を探究してみよう。易についての内容は複雑怪奇であって尋常一様なものでないことは今も述べておいた通りであるがそれと同様、作者についても古来より一定していないのである。すなわち易は一時代に同一の人によって作られたものでなく、その作者や時代に関する種々の見解も要するに推定に過ぎないのである。幾多の論説はさておいて、先ず八卦を作ったのは伏羲であるとされており、これに対しては余り異論はない。ところがこれを重ねて六十四卦——つまり重卦というがこれを工夫したのは誰かということになると、かなりの異説がある。その一は伏羲説（王弼）、その二は神農説（鄭玄）、その三は夏の禹王説（孫盛）、その四は周の文王説（司馬遷）等であるが、この四番目の司馬遷の説には賛成者が比較的に多い。その理由を挙げてみよう。史記周本紀曰。「文王囚羑里。蓋益易之八卦。為六十四卦」とありまた前漢書司馬遷伝曰。「蓋西伯拘而演易」と述べてある。同芸文志曰。「文王以諸侯順命（中略）於是重易六爻作上下篇」ともいっている。法言曰。「易始八卦。而文王六十四」と。ところで「掌三易之法。一曰連山。二曰歸藏。三曰周易。其經卦皆八。其別皆六十四」（周礼。春官の大卜）によってみるならば、周以前すなわち文王より前にすでに六十四卦が存在していたことになる。そうしてみると文王

以前に六十四卦というものがあつたとして推定することも可能な説であることになる。若しくは文王以前に六十四卦を作成した一哲人が存在したのではあるまいか、と疑念がつぎからつぎへとおこってくる。とにかく太古から存在しているものだけに異説紛々であつて、いずれもみな学術的研究の結果、求められたものでなく、単に一種の驚説に過ぎないものばかりである。従つて私は通説の如く六十四卦の作者は文王に一応断定し次に進んでいくことにしたい。さて象辞および彖辞であるが、これは文王と周公の作であるといわれ穩当な説とされている。しかし十伝（十翼）についてはこれまた種々の異論があるので追究してみることにする。

司馬遷が孔子世家において孔子の作と断じてから、それ以来、十伝の作者はほとんど孔子であるとの定説となるに及んだ。漢書の芸文志に「易は三聖を更え、三古を歴て成る」云々と称して、上古においては伏羲が卦を画し、中古においては文王・周公が卦及び爻の辞を繫け、近古に至つては孔子が十翼を作つた……とこのように明記されているが、宋時代に入るや、經典の批判的研究がとみに盛んとなり、その結果、十翼の作者は大体において孔子の作ではないことになっている。研究者の一人として記憶に残っているのは歐陽修である。彼によれば、十翼の文義と論語を比較対照してみると必ずしも孔子の作と断じがたい文意が屢々発見される——のだと説いており、しかも象と彖とは孔子以前に既に存在しておりこのことは明白になっている。従つてこの問題は現存せる文献だけによる時は永遠に解けざる謎として残されていくのではないか、と思惟される。ともあれ易の經文と十翼とは思想的には当然、何等かの相違あるを免れないのであり、また同じ十翼の中にも繫辞、文言伝とあるようにそれぞれの目的にしたがつて異なるのである。しかし十翼そのものの根本目的が易の解釈にある限り、同一系統の思想たることは論を俟たない。そこで易自身の解釈が十翼を通して解く能わざる以上、或は到底不可能であるとすれば尚更、嚴密な考証的研究の結果を得るまで追究しなければなるまい。さて易の内容

と作者に関してはこの程度に留め、次に字義の説明に入ってみることにする。

「易」という文字であるがこれについても、その説明がマチマチである。先ずその一つは<sup>・</sup><sup>・</sup>日月を合わせて易の文字としたという説がある。

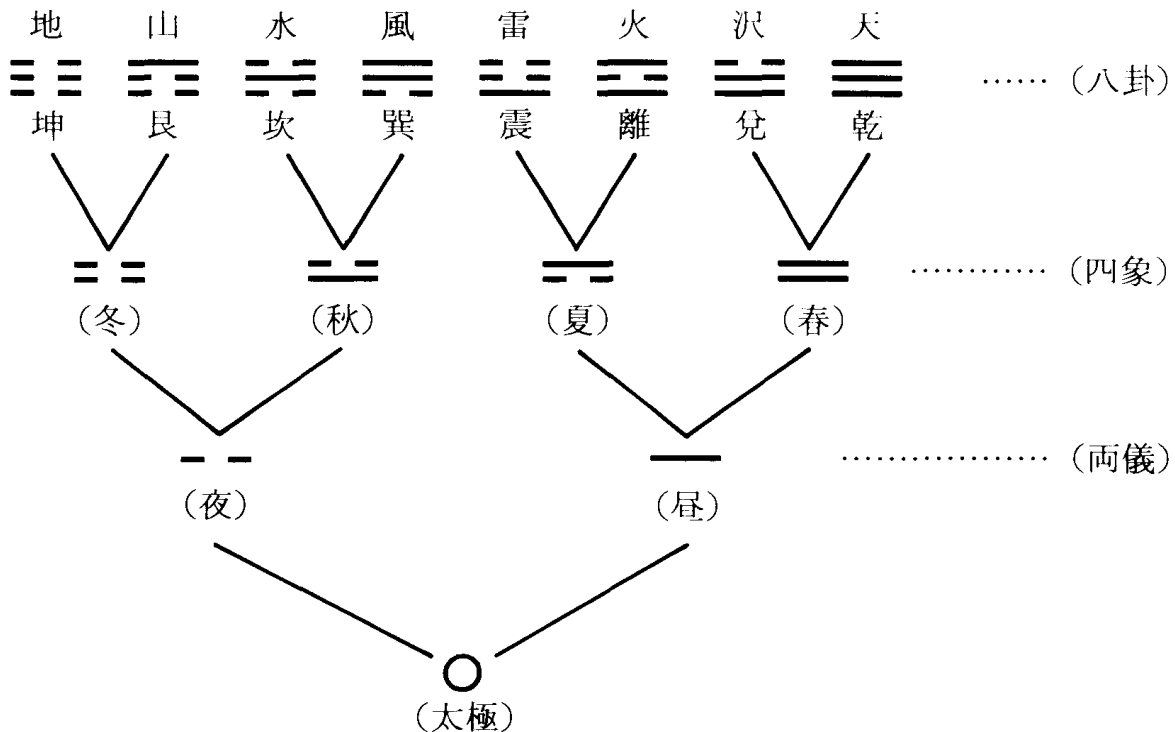
「易」……………  —「日」を表す  
—「月」を表す  
「勿」(コウ) = 天象をいう

秘書説曰。「日月為易。象陰陽一也」とある。これは日と月が重なって易という文字を構成したという説である。「海南日抄」という書の中にこの説に賛成したものがいるので参考まで記しておく。すなわち白玉蟾が「日月在天為明。明日月横合。在世為易。易者日月之縦合。在人為舟。舟者日月之重合」といっている。次に説文による易字をみてみよう。それによれば「易は蜥蜴・蝮蛇・守宮にして象形なり。周易の義疑うらくは此に出づべし。蜥蜴は日に十二時変色す。故に易と云う」とある。易という文字は象形文字で蜥蜴・蝮蛇の形をとったものであるという説である。この蜥蜴・蝮蛇という虫は一日のうちで十二度も色を変えるというところから、易の字義が生じたとしている。朱子は「交易・変易の義あり。故にこれを易という」といい鄭言がさらに補足して「易は一名にして三義を含む」といって易簡・変易・不易の三つを挙げているが、変易をもって易の根本觀念となすことにおいては一致している。このことについては弁証法的な考え方の項において述べた通りである。また易の字は本来、日の下に月を書くものであるとし、そこに陰陽柔剛、相依属するという意に解する場合、多分に神的乃至、宗教的觀念を抱かせしめるものがあることを述べてこの項を終わりたい。

#### (4)易の組織について

易の組織について文章にあらわれているものは繫辭伝（上・下）である。すなわち「易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。八卦定吉凶。吉凶生大業」。（上）「八卦成列。象在其中矣。因而重之。爻在其中矣」。（下）と記されている。ここでいう太極は既に老子の講で詳しく説明しておいたので省略することにするが、この太極は宇宙間におけるすべてのものの根本実在となっている。この太極は分れて兩儀を生じ陰陽の二つに別意されることは言うまでもない。シムボルで表わすと陽は——であり、これを単という。陰は— —でありこれを拆といっており、易の組織においては根本をこの陰陽二元論においてある。すなわち陽は積極的にしてまた活動的のシムボルであるとし、陰は消極的にしてまた静止的のシムボルであるとしており、この二者の組合せによって宇宙のすべての現象が成立するものとしてみている。言わばactionとreactionとの対立でこの両者の性質の相反せること、またその相関的なことはあくまでも注意しなければならない。この二つの組合せ————と— ———が組合せられた場合、四通りのものが出来ることを知るであろう。すなわち繫辭上傳にあるように「兩儀生四象」である。換言すれば ☰・☷・☲・☵ で、これを別に上から太陽・太陰・少陽・少陰といい四象と呼んでいる。次にこの二つが三つ重なった場合、八通りになる。すなわち ☰（乾）☱（兌）☲（離）☳（震）☴（巽）☶（坎）☴（艮）☷（坤）で、これが俗に言うところの八卦である。各記号の下の語はそれぞれの形を表わしている名称とみてよい。また自然の現象を性質上、これに配して天・沢・火・雷・風・水・山・地としている。（図2参照）このように人が生活していくうえにおいて、最も密接な関係をもっているところの八大現象を総合組織し、この自然現象をさらに分析し、自然科学的なものと人文科学的なものに分類し、人間の創意工夫によって幸福を求めんとするところに易の意

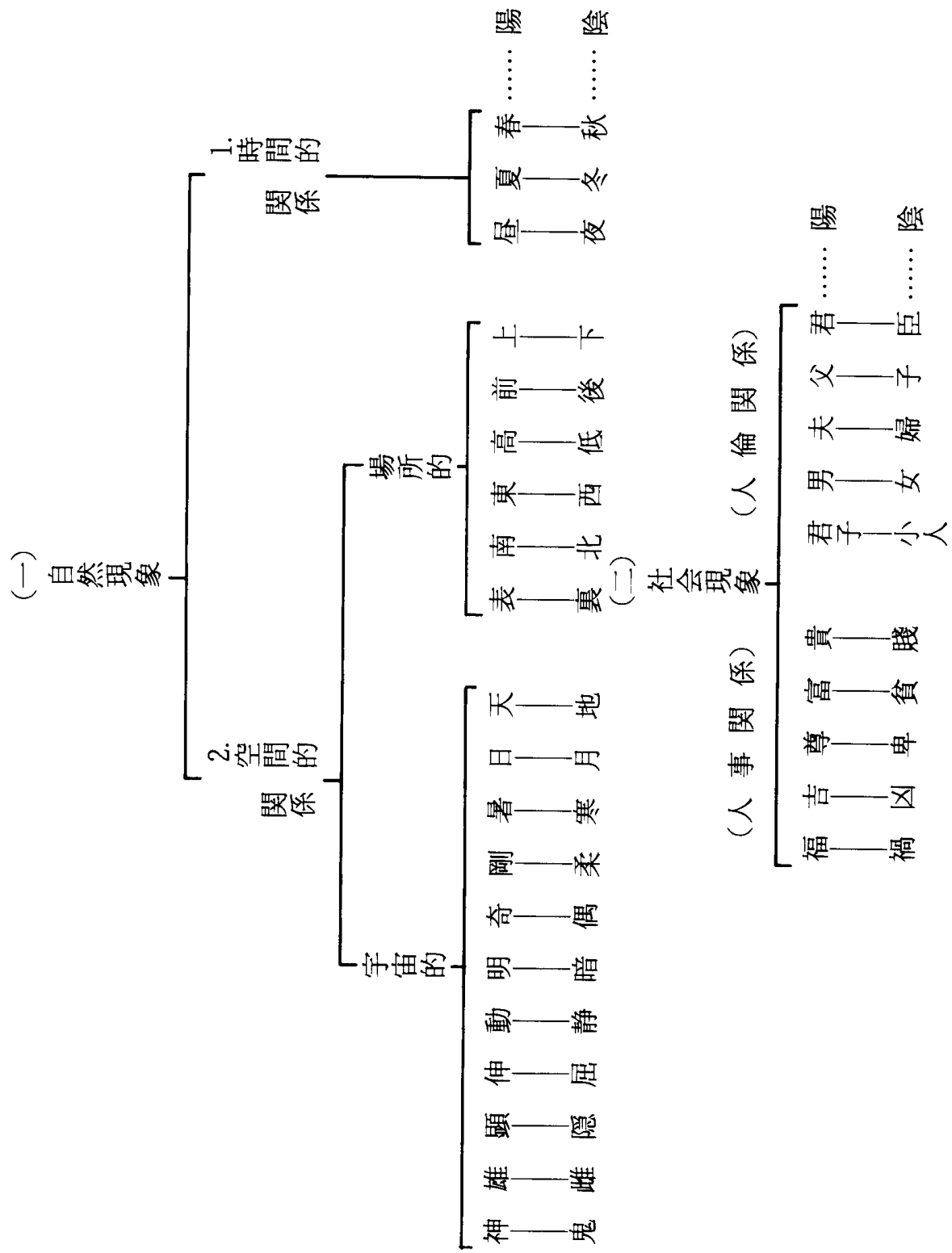
図 2



義，使命を見出すことができる。


説卦伝に八卦を徳と称し，一定の意義があるとして「乾は健なり，坤は順なり，震は動なり，巽は入なり，坎は陷なり，離は麗なり，艮は止なり，兌は説なり」と述べている。これらの卦を今少し説明を加えてみると

(1) 乾の卦(☰)は運行して暫くも休止することなき天体の象徴であって，いわゆる天行健なる所以であるという意味をいう。(2) 坤の卦(☷)は天の気をうけて物を作成するところの地体の象徴であって，柔順という意味である。(3) 震の卦(☳)は二気の交感によって陽気が初めて発生した結果，雷鳴が起って万物を震動発生するところの雷の象徴であって，そこから動という觀念が抽象されたものでもあり，また初めて陽気発生してこれより活動せんとする意味である。(4) 巽卦(☴)はあまねく吹きめぐって入らざるところなしという風の象徴であって，それから人の意義が生ずるものとし，また一陰が二陽の間に侵入している有様を

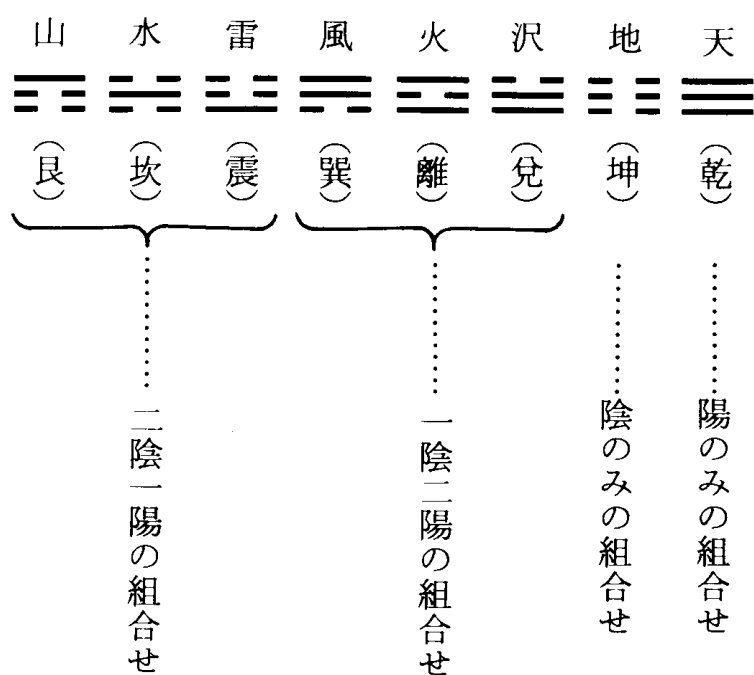


意味としている。(5) 坎の卦(☵)は常に低いところに存在しているところの水の象徴で、陥であり險難でもあり、また一陽が二陰のなかに陥落しているという意味になっている。(6) 必ずものに燃えつくところの火は離の卦(☲)の象徴であり、そこから麗しくという意味が起る。(7) 艮の卦(☶)の象徴は山で、その山はつねに静止しているというところから止という意味がある。(8) 兌の卦(☱)の象徴は沢であって、その沢につねにうるおさるるところの万物は、すべて悦ぶものであるから兌は説なりということがおこるし、兌の卦象は人が口を開いて笑っているようでもある。

さて八卦についての概説はこの程度にとどめておくとしても、それでは「卦」と「爻」についての関係は一体どうなっているであろうか、探ってみる必要がある。すなわち卦の字義は「掛」というのが本来の語であるといわれている。これは宇宙万物の形象を<sup>●●●</sup>かけて人に示すということの意味し、爻(つまり—・— —のような陽陰を表わす記号)の字義は效であって、宇宙万物の形象にならうという意味であると説明されている。故にこの爻には陽(—)と陰(— —)との両様があり、いわゆる卦なるものの構成組織の基礎をなしているのである。そしてその爻によって組立てられたところの卦なるものが、易の根本をなしているといってもよい。従って易を解くには先ず「卦」を知らなければならないし、その卦を知るにはまた爻を解することができなければ話しにならない。この意味において卦爻の解釈は相互依存によらなければならないことになる。今、一例を挙げてみよう。☵(坎の卦)をみるときはこれを卦ということが出来る。☶はまた小成の卦ともいう。この卦を構成するものは— —のシムボルが二つで、— —のシムボルが一つでそれぞれを爻と呼んでいる。一線の中央が中断されているのを陰爻、中断されざるを陽爻と名づけている。小成卦とは陰爻(☶)のみか或は陽爻(☶)のみか、または陰陽両爻をとりまぜてか、ともあれ三爻より成るものをいっている。さらに小成卦は大成

卦に対していう辞であって，この大成卦は重卦の義である。換言すれば小成卦を二つ重ねたものであり六爻より成るのである。例を示すと  (乾為天。詳しく後述する) になりこの大成卦の組立により始めて占うことが出来るのである。

今この八卦の成立をみると

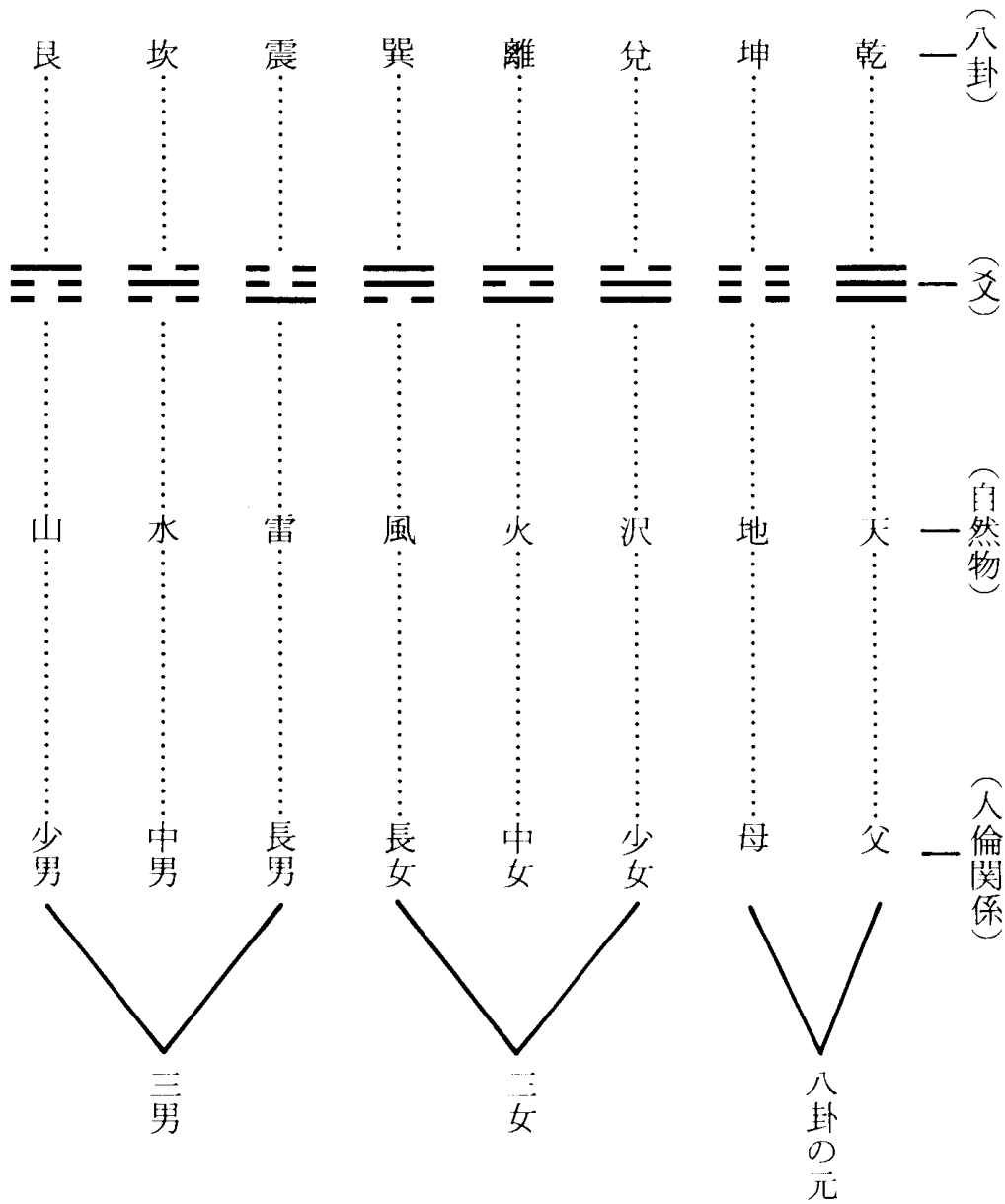


……となる。

上のうち一陰二陽の場合は乾の卦が坤の作用を受けたものとみてよい。さらにまた二陰一陽の場合は坤の卦が乾の作用を受けたものとみられる。次にこの八卦を自然物と父母六子（人倫にあてはめてみる）に配当してみると図の如くになるので参考まで記しておこう。

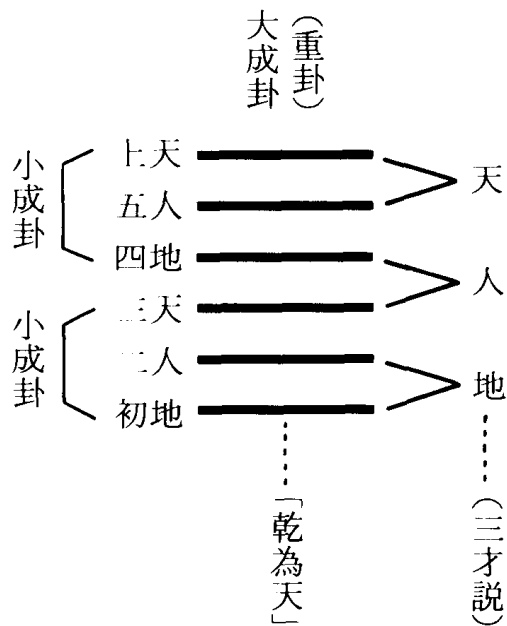


図 4



乾すなわち陽——換言すれば積極的性質のものと坤すなわち陰の消極的性質のものと二元が対立し、その二つの組合せが二次的には四象となり、三次的には八卦となるのであって、自然現象を性質上これに配して天・沢・火・雷・風・水・山・地とし、人倫の間にこれを当ててみると上図の如く父母三男三女というようになるのである。易では以上のものをもって一つの公式とし、それによって人の現象を説いていく方法を考驗しているものとも思える。この八卦を小成卦と名づけていることは前にも述べておいた

図 5



が、この八卦が八通りの変化、組合せをすると六十四卦となり銘々の意義が生じてくる。たしかに六十四卦は陰陽二元からみれば二つの異なった性質のものが、六つずつ組合わされた場合のものであって、これは数理からいっても六十四通りしかできないのである。もっともこの六十四卦のできる前に二の四乗、すなわち十六、二の五乗すなわち三十二の場合がある。また六十四卦後の二の七乗すなわち百二十八、二

の八乗すなわち二百五十六等々と無限大に拡張していくことができるが、易においては六十四卦・三百八十四爻をもって哲理を組織しているのである。その理由について今少しく論じてみよう。

本来、八卦の成り立っている三画卦（例えば☰）は天地人三才（三極——pole——）を象ったものであって、これを重ねても、また二つずつ天地人に当ててみるのであって、それ以外は一切触れないことになっている。くわしくいえば、八卦の場合の三つのうち、上の部が天、下の部が地、中の部が人に当たり、六十四卦の場合の六つのうち上の二つが天、下の二つが地、中の二つが人に当たると考えられている。繫辞（下）伝にその証が挙げられている。すなわち「易之為書也。廣大悉備。有天道焉。有人道焉。有地道焉。兼三才而兩之。故六。六者非他也。三才之道也」と。図5をもって示すと上の如くなる。また説卦伝にもこの三才のことが記述されている。<sup>1)</sup>

「昔者聖人之作易也。將以順性命之理。是以立天之道。曰。陰与陽。立地之道。曰。柔与剛。立人之道。曰仁与義。兼三才而兩之。故易六画成卦。分陰分陽迭用柔剛。故易六位而成章」とある。この文章はまた易の宇宙観

としてみることができる。要するに易においてはこの三つの場合、或は六つの場合が最もふさわしいものとしてとり扱われているのである。その理由をもう一度整理してみると以下の如くである。およそこの宇宙間にある事象は、みな天地人の三才が基本となっではじめて生ずるものであるから、従って数が無限に布演拡大することは易の本旨でないということにある。あくまでも六十四卦、三百八十四爻とをもって宇宙のすべての事象を兼ねているものとしてみているのである。

注 1) 説卦伝

これによれば繫辭伝と異なり「参天兩地而倚數依」と説いてある。つまり(☰) 乾の爻を三つならべた(組立てた)ものが「参天」であるとして考えている。「天」の字は草書によると「𠄎」というように☰が三つあるという意味になる。朱熹はまた有機的乃至非有機的・幾何学を形に表わして物を考えたという。そしてそのなかには天地宇宙の真相とか或は人類における一つの規範となるべき人倫の意が含蓄されており、ここにも易の使命が存在している。

## (5) 八卦の性質とその意義

易の組織において一陰一陽が第一次的の基本要素であり、次に八卦が二次的の基本要素であるということは既に前項で述べておいた。そこで八卦の性質を考えてみる必要があるので説卦伝を引用してみることにする。昔から「名目あってその義なしということとはあり得ない」とよく言われているが、これはつまり天地の定理を指示した言葉でもあろう。前述の如く宇宙現象の天、地、雷、風、水、火、山、沢は乾、坤、震、巽、坎、離、艮、兌という八卦の名が付され、この名について正訓音釈を垂下している。すなわちその意義は健、順、動、入、陷、麗、止、説というように説かれているが、これは卦の象でありまた卦の性情でもある。そこでこの字訓音

義を解釈してみると「乾健也。坤順也。震動也。巽入也。坎陷也。離麗也。艮止也。兌説也」とこのように也の字を下して名字の訓義を訳している。またその卦象を説いて「乾為馬。坤為牛。震為龍。巽為鷄。坎為豕。離為雉。艮為狗。兌為羊」と述べ象ごとに為の字を下しているのは注目に価することができる。(図6参照) この也と為の字はその釈字と説象との文法を明瞭にしているのである。

図6

動物	人体	人倫	性質	宇宙現象	種別 八卦
馬	首	父	健	天	乾 ☰
羊	口	少女	説	沢	兌 ☱
雉	目	中女	麗	火	離 ☲
龍	足	長男	動	雷	震 ☳
鷄	股	長女	入	風	巽 ☴
豕	耳	中男	陷	水	坎 ☵
狗	手	少男	止	山	艮 ☶
牛	腹	母	順	地	坤 ☷

図7

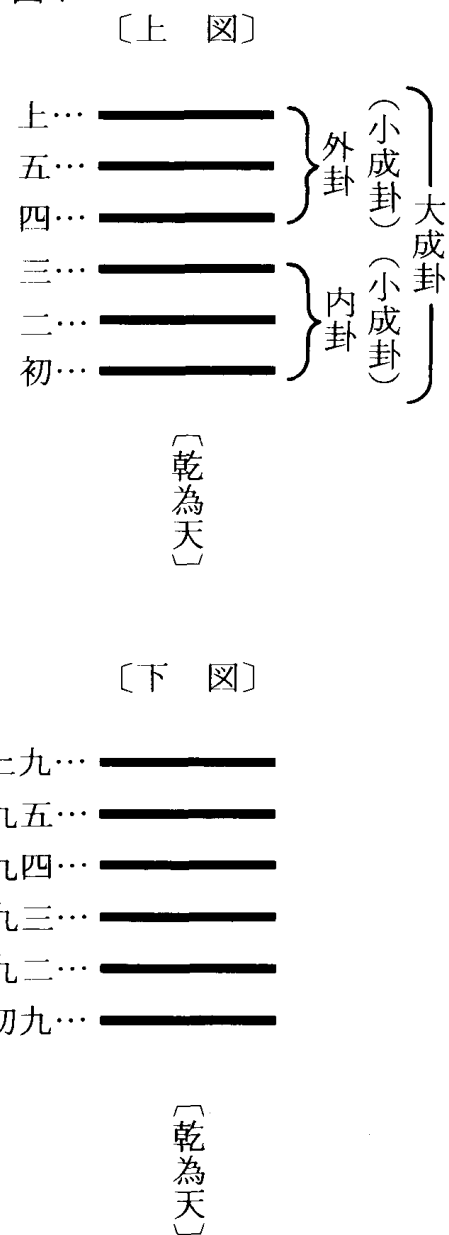


図6のように配列してみたが、この八通りに分別した表をみるといずれもが相対的になっていることに気がつくであろう。つまり☰と☷、☱と☶、☲と☵、☳と☴であり、これらは前にも述べたように小成卦であり、八卦をかさねてできたものを重卦ともいい、大成卦ともいい六十四卦あるのである。

次に一卦の成立について説明してみることにしよう。一卦のうちの一つ一つを爻といい、それが——の場合これを陽爻、--の場合陰爻とよび、このことについても既に述べておいた通りであるが、一卦は六爻の組立てによって成立し、下より上に数えていく順序になっていることを注視しなければならない。試みに例をもって示すならば上図の如く最下の爻を「初」といい、次を二、三、四、五、最上の爻を「上」と呼んでその位置を示している。(図7参照)

「乾为天」の卦の場合は明らかに陽爻である故に下図の如く各爻ごとに呼び名がある。すなわち初九、九二、九三、九四、九五、上九と呼ぶのである。ところが陰爻の場合には、それと異なり次の如くになる。今その例として「坤为地」の卦を挙げてみる。

図8

上六…… ☷  
 六五…… ☷  
 六四…… ☷  
 六三…… ☷  
 六二…… ☷  
 初六…… ☷

〔坤  
 為  
 地〕

左図の如く陰爻ばかりで組立てられている「坤为地」の卦は、初六、六二、六三、六四、六五、上六と呼び、これが原則となっている。(図8参照) それでは今一つの例として「沢水困」の卦を示してみよう。すなわち☱☵で

ある。この卦は陽陰の爻が入り混っているので如何に各爻を呼ぶのかが問題となってくる。

図 9

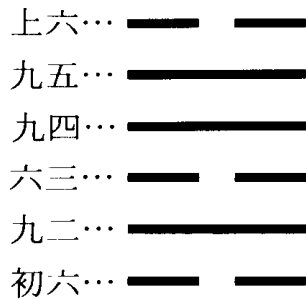
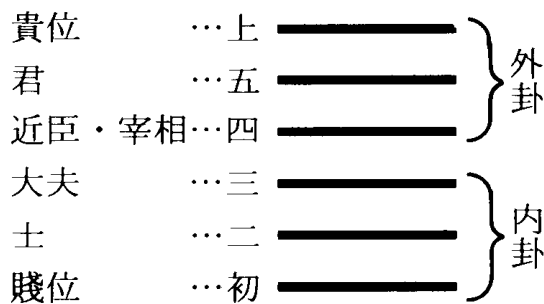


図 9 によれば、それぞれ位置したところに呼び名をあてているので注意してほしい。

さて陽を「九」の文字で表わし、陰を「六」の文字で表わしている理由は、いずれ後述するとしてもこれはただの数ではないことを知っておく必要がある。ともあれ乾卦では下より初九、九二、九三、九四、九五、上九となり、坤卦では初六、六二、六三、六四、六五、上六というのである。またこの六爻のうち下の三爻を内卦・下卦、或は貞卦といい、上の三爻を外卦・上卦または悔卦とよんでいるのである。次にこの六爻にはそれぞれ「位」が配されていることを知っておく必要がある。

図10



(図10参照) 先ず初・三・五を陽位、二・四・六を陰位という。こうして第五位を君、第四位を近臣・宰相、第三位をこれにつぐ大夫、第二位を士の位にあて、六と初とは位がないとみる。また六を上皇とか法皇の位にあて、初は平民にあててみてもよく、これをこの道で貴賤の位と呼んでいる。ついでこの六爻にはそれぞれに徳が配されているから徳そのものの資質を考えねばならない。すなわち陽爻は剛・陰爻は柔といい、各々その場合によって善悪吉凶を分ける。剛は必ずしも善・吉でなく、柔必ずしも悪・凶ではない。その卦の性質によって各々善悪吉凶が異なってくるのである。また中正・不中正というのがある。それは中とは第二爻と第五爻とがいずれも内外卦の中位にあるからに他ならない。ところが内卦の中位が陰位、外卦の中位は陽位であるから、もし第二爻が陰、第五爻が陽であれば、い

ずれも中正を得ているといえるがこれに反する場合は不中正であるというものである。次に一つ一つの爻について当否の別があるという。すなわち陽位には陽爻、陰位には陰爻がきた場合は当であるが、(これを位爻相当という) 然らざる場合は不当で位爻不相当となる。また応ということがある。内卦の初・二・三と外卦の四・五・六とは各々小成卦の三爻で互に相応じている。それで一方が陰で他方が陽であればこれを応という。然らざる場合は不相応で応爻をもたないというのである。ただしこの場合、主として第二爻と第五爻とについていい、他の爻の場合にこれをいうことはほとんどないといってもよい。また比<sup>6)</sup>ということを立てる場合もある。それは一と二・二と三・三と四というように逐次相比する爻についていう。すなわち相並び相連なる上から関係が深いことを意味するのである。ただしこの比と言うのは、主として四と五について、出てくるので他の場合には多く言わない。以上、述べたようにそれぞれの卦爻の資質が吉凶判断の材料になり、大切な意義を含むことになるので充分に検討せねばならない。

## あとがき

筆者は本学「研究論集」第29号の政治倫理考に、東洋政治学の思想的背景の一局部面を点滴し、師父である故明治大学総長 鷗沢総明先生の遺訓書を引用させていただいたが、所詮、政治は生きもので変転万化するこの世にあっては、正に一寸先は真暗闇であるので、このたびも先生の政治哲学の著書を柱として、せめても人格完成への理想型政治家の出現を期待するために、易経の中に潜在している政治思想の概見を試みた次第である。またそうすることによって中国人の世界観にできるだけアプローチすることは、中国と我が国がヨリ強く結ばれることを意味づけ、世界平和を保障する所以であると考え。すくなくとも日本人に影響を与えた易経は、いろいろな形で吸収摂取されていったことは確かである。またそれが

日常生活の中で活きている事実を中国の人々に知って頂くよすがになるとすれば、日中双方の理解の上に大きく役立つのではあるまいか、と筆者は愚蒙を顧みずそう信じている。「王が国民の安寧を希求するのも、大統領や書記長が己れの支配する国民を愛撫し、忍びざるの心を以て民に接するの情には何らの逕庭はない筈である。そういう意味において今の中国を考えてみると、中共での革命は原始儒教への回帰であると老生は感じる」と森脇皓州先生が『周易釈詁』の著書の冒頭で述べているが、その言葉は今だに筆者の胸中に焼きついている。森脇先生のことについては、筆者が一昔前、淑徳大学に非常勤講師として出講していたとき、保健主任の一瀬茂子先生より拝聞して存じあげていたが、その後、先生より『周易釈詁』の著書の贈賜があり、大変恐悦し東洋政治思想を専攻している筆者にとっては、同性相求め同気相応ずる師に再びめぐり会えたような気がしてならなかった。また、ご縁とはいうものの故人になられた本学の副学長 大島藤三先生が『周易釈詁』は印刷して世の中に残すべき価値あるものと判断し、龍溪書舎にその旨を告げ、ご協力申し上げた由を後日、一瀬先生のお便りによって知らされたが驚き入った次第である。

次号はその意味において、平成元年7月23日、自民党が参院選で大敗。宇野元首相が退陣を表明。8月9日、第一次海部内閣が発足した当時を思い出しながら、政治の激動仕末記を易経よりみた政治世相談義に話題を変えて筆を進めてみたい。ともあれ、易経の政治形体の最良最善の考え方は、「王」であろうと、「大統領」であろうと、或は共產主義国家の最高位の「書記長」であろうと、主権を行使する位置にある限り、その果たす使命は本質的には不変不易であることを強調して綴文を閉じることにする。



## 参考文献

※この小稿は恩師 鶴沢総明先生の著書「政治哲学」(大東書館)を基盤として綴ったものであり、尚筆者の助手時代に整理した「易」講座ノートを引用したことをお断りしておく。その他に参考資料としての著書を紹介しておこう。

- 根本通明著「周易講義」荻原星文館  
山口 察 著「易の根拠と応用」大東出版社  
前島熊吉著「体験廿一世紀之科学」(易) 荻原星文館  
小林一郎著「易経大講座」(第一巻～第十二巻) 平凡社  
森脇皓州著「周易釈詁」龍溪書舎  
狩野直喜著「中国哲学史」岩波書店  
小柳司気太著「東洋思想の研究」森北書店  
楊幼炯著 「支那政治思想史」大東出版社  
村田孜郎訳  
宇野哲人著「支那哲学史講話」大同館蔵版